様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８４０７９

研究課題名（和文）現代哲学における「政治的なもの」概念の究明：ナンシー哲学研究を中心として

研究課題名（英文）The Concept of "the Political" in Contemporary Philosophy: Forcusing on the Philosophy of Jean-Luc Nancy

研究代表者
柿並　良佑（Kakinami, Ryosuke）

立命館大学・言語教育センター・嘱託講師

研究者番号：４０７０６６０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：「政治的なもの」に関する原理的研究を行い、成果として論文数点を発表した他、まもなくラクー=ラバルト＆ナンシーのテクストの翻訳を発表予定である。また期間中に二度の渡仏調査を行ったが、その間、研究者と貴重な対談、インタビューを行うことができた。その一端は既にWebに公開されているが、残りの分についても発表予定である。

研究成果の概要（英文）：We have done the theoretical and fundamental research on the concept of "the political" so that we have published several articles and will publish translations of important texts of Lacoue-Labarthe and Nancy.
Moreover, we could have occasions of interviews with researchers in France. A part of the results is already published on internet sites; others will be published soon.

研究分野：哲学

キーワード：哲学　現代フランス哲学　政治思想　政治哲学

１．研究開始当初の背景

（1）研究開始当初は哲学における「政治的なもの」に関する原理的研究は国内ではほとんど見られなかった。海外においても個別の思想家におけるテーマとしてこの概念を論じるものは散見されたが、一つの哲学的主題として横断的に取り上げるものは限られていた。
（2）ナンシー哲学研究の観点からすれば、初期の思想と「政治的なもの」概念の関連は明確であるものの、その点を重視する研究はほとんど見られなかった。
　主に以上の 2 点からナンシー哲学研究を出発点とした政治的なもの概念の研究の必要があった。

２．研究の目的

（1）1970 年代後半から 80 年代にかけてフランスにおいて活発に交わされた「政治的なもの」をめぐる議論を取り上げ、この概念が現代の政治を問い直す議論の中にどのように導入され、練成されていったかを明らかにする。その際、ナンシーらが主催した「政治的なものに関する哲学的研究センター」が出版した 2 冊の論集を中心に取り上げ、「政治的なもの」という概念の内実を明らかにし、以後のナンシーらの思索の営みにおいて、それがいかに主導的概念として援用されていくかを跡づける。
（2）この議論に参加した哲学者たち、すなわちナンシー、ラクー＝ラバルト、デリダ、J-F・リオタール、ランシエール、ルフォール、E・バリバール、バディウら、今日なお「政治的なもの」をめぐる議論の主要な参照項である思想家たちにおけるその後の発展を追う。これらの分析を通じて、他者との共生を主眼とする共同体論、さらには根源的な共同存在をめぐる存在論的思考に対して「政治的なもの」という概念がいかなる役割を果たしているのかを明らかにする。

３．研究の方法

　20 世紀思想史における「政治的なもの」の概念の検討のため、(1) ナンシーを中心とする 70 年代以降のフランス哲学における「政治的なもの」の概念の生成・発展過程の検証、(2) 同概念のその後の発展および今日的意義の検討、の各段階にそれぞれ一年度を充て、多面的に進める。
　研究に当たっては、従来の文献調査、読解、考察、論文執筆の過程を経ることはもちろんだが、国内の研究者との協力体制も重視し、適宜研究会やリサーチ・ミーティングを開催する。
　また海外の研究者との連携を推し進めていくことも念頭において、渡航によるミーティングあるいは共同討議やワークショップなどの方法をとって、個人研究の障壁を乗り越える。

４．研究成果

　研究の主な成果として既刊論文の⑤「存在論は政治的か？」では、ナンシーの政治思想を時系列に沿って概観しつつ「政治的なもの」の概念がどのように用いられているかを明らかにした。80 年代初頭のラクー=ラバルトとの共同作業に始まり、『無為の共同体』での共同体概念への統合、またバイイとの共著『共出現』での政治と存在論の接近といった流れのうちで「政治的なもの」は哲学の枢要概念にまで鍛え上げられたかに見える。しかしその後、2000 年前後にナンシーは一種の「自己批判」を行う。以後、共同性の問いと政治の新たな連接が考察されることになる。そこでは「政治的なもの」と「政治」という初期の区別が、精神の息吹としての「デモクラシー」と「政治」の峻別に場所を譲っているように見える。後者の概念対が前者のそれを引き継ぐものであるのかどうか、今後の研究の一課題となろう。
　また「政治的なもの」という概念がナンシー哲学のもう一つの鍵語である「退引（retrait）」とどのように関連しているのかを明らかにしたのが③「哲学の再描」である。デリダがハイデガー読解の中で準‐概念として取り出したこの語をナンシーとラクー=ラバルトは政治思想に「応用」したように見える。だが、哲学と政治がそのような原理的な学と派生的な学へ単純に区分されない以上、「退引」概念もまた応用ないし適用という観点から語りうるものではなかった。先の論文⑤でも、最終的に政治と、ナンシーのライフワークである「キリスト教の脱構築」との関連が考察されたが、ここでもまた「退引」の歴史的・神学的含意に照らした考察が必要とされた。「退引」は存在と神の双方に用いられる概念だが、存在神論（Onto-theologie）に見立てられる限りでの西洋哲学の歴史に関わっている。ナンシーにとって神（々）の退引は「神の死」以後の哲学の可能性を開く条件のごときものとして機能しているが、他方で西洋哲学に大きな枠を課すものではないか。デリダが開いた退引の複数性という問題系をナンシーの思想がどのように展開しているのかという点が、さらなる課題として浮上した。
　その他、ナンシー哲学の個別の論点を扱った論文でも「退引」概念との連関は常に重要な参照先となった。しばしば政治と連動して語られるトピックであるがナンシーがさほど主題的に語らないように見える経済の問題を扱ったのが②「ジャン＝リュック・ナンシーの「エコノミー」論」である。エコノミー概念にまつわる問題系は西洋思想史上に偏在しつつもその多義性ゆえに俯瞰しがたい。そこで『キリスト教の脱構築』第二巻に含まれる断章「エコノミー」の解題という形をとりつつ、ナンシーの経済思想なるものを仮構してその要約的報告を行った。なお掲載

雑誌『Nyx』にナンシー自身のコメントを要望したところ、急遽応じてもらえたため、翻訳掲載した。古代（アリストテレス）以降のエコノミー概念のうちでどのように超越概念が作用しているかを示唆するなど、ナンシー研究にとっても、短いながら重要な資料となろう。

また政治的‐経済的ネットワークの今日的形態をナンシーがどのように把握し分析しているかという点について、⑥「「技術」への階梯――経済技術から集積へ」を発表した。これは、「フクシマ」以後の哲学的課題を概観する『カタストロフの等価性』の日本語版に併録された論考「集積について」で展開される謎めいた技術論の解明を主旨とするものである。それを理解するためには主に 90 年代にナンシーが援用していた概念である「エコテクネー」を理解する必要があるという見立てのもと、ナンシーの「技術哲学」を再構成した論文である。ナンシーが追及してきた「政治的なもの」の一種の変質の例としてこのエコテクネーを捉えることも一方では可能であるだろうが、他方そこには一縷の希望も託されていた。それが集積においては消失しているように見えるため、今日における技術論の走査における足がかりとしたい。

論文執筆と並行して重要文献の翻訳も進めた。特にナンシーとラクー=ラバルトの共同作業である論文「政治的なものの退引」（1983 年）については、同時代の思想家との対照作業を含むテクストの精読の成果として翻訳を発表予定（発表媒体決定済）である。

直接の成果ではないが、間接的にナンシー研究が反映されている翻訳として、「パラレルな差異　ドゥルーズ＆デリダ」、『現代思想』青土社、43(2)、2015 年 1 月（大池惣太郎との共訳）、がある。そのほか、発表媒体などは未定だが、複数の著書、論文を翻訳・発表の予定である。

在外研究についてだが、資料調査はもちろんのこと、複数の研究者、思想家にインタビュー形式で議論することができた。その一端はジャン=クレ・マルタンとの対話であり、「フクシマの後で資本主義を考える」と題してマルタンの主催するウェブサイトで公開されている（5.その他の欄を参照）。これはもともと気軽な意見交換の場から発展した議論だが、今後も継続的に行う試みとして発表されたものである。

その他、ナンシー＆ラクー=ラバルトを良く知る、クレール・ナンシーやジャン=クリストフ・バイイといった人物への聞き取り調査を行うことができた。とりわけ 70 年代後半から 80 年代にかけて、「政治的なもの」をめぐる思想状況がどのようなものであったか、その運動の中心にいた人物の視点から語られる話は、歴史的資料として非常に重要なものであった。これについては本人の許可を得た上で、インタビュー記事などの形での発表を予定している。

本研究の位置づけだが、現時点の発表論文等ではナンシー研究の枠を大きく超えるものでないことは反省点としなければならない。だが、そもそもほとんど取り上げられたことのなかった「ナンシーの政治哲学」を一定の形をもって示すことができた点は強調しておきたい。この成果は近く刊行される著書のナンシー論に組み込まれ、その中核を成すものとなろう。

なお今後の展望だが、政治思想や精神分析との関連についてはリサーチミーティングも研究期間中 4 回にわたって行った。その成果は共著として発表予定である。また『政治的なものの退引』については論集全体の翻訳を準備する。

研究の全体は 2015 年度に開始した若手研究 B「現代哲学における特異性概念の探究」（研究代表者は本研究と同じく柿並良佑）に引き継がれる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

①<u>柿並良佑</u>「ジャン=リュック・ナンシーの身体論――『コルプス』読解を中心に」、『立命館言語文化研究』26(3)、91-105、2015 年 2 月、査読有。

②<u>柿並良佑</u>「ジャン＝リュック・ナンシーの「エコノミー」論」、『Νύξ（ニュクス）』堀之内出版、158-167、2015 年 1 月、査読無。

③<u>柿並良佑</u>「哲学の再描：デリダ/ナンシー、消え去る線を描いて」、『思想』岩波書店、1088、333-354、2014 年 12 月、査読無。

④<u>柿並良佑</u>「有限者の試練――キルケゴールとナンシー」、『現代思想』青土社、42(2)、80-94、2014 年 2 月、査読無。

⑤<u>柿並良佑</u>「存在論は政治的か?」、『思想』岩波書店、1078、67-93、2014 年 2 月、査読無。

⑥<u>柿並良佑</u>「「技術」への階梯――経済技術から集積へ」、『グローバル化時代における現代思想』2、29-47、2014 年 1 月、査読無。

〔学会発表〕（計　1　件）

□<u>柿並良佑</u>「有限者の試練」、「現代思想の源泉としてのキルケゴール――生誕 200 周年記念ワークショップ」、高崎経済大学（群馬県高崎市）、2013 年 11 月 30 日。

〔図書〕（計　1　件）

①（翻訳協力）合田正人編『顔とその彼方―レヴィナス『全体性と無限』のプリズム」、知泉書館、2014 年 3 月、240 頁（担当箇所：77-101 頁）。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
哲学者ジャン=クレ・マルタンとの対話
「フクシマの後で資本主義を考える」
http://strassdelaphilosophie.blogspot.jp/2014/05/penser-le-capitalisme-apres-fukushima.html

６．研究組織
(1)研究代表者
柿並　良佑（KAKINAMI, Ryosuke）
立命館大学・言語教育センター・嘱託講師
研究者番号：40706602

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：